

生涯青春

こんな話が、伝えられている。

ピカソが画壇に於いて、世界的な巨匠としての評価が定着した晩年のある時、新聞記者が訪れて、ピカソに訊ねた。

「ピカソさん、あなたの代表作は、どの作品でしょうか」

ピカソはパイプをくわえたまま、ニコリともせず、答えた。

「明日、描く絵さ」

毎日、アトリエで、創作にいそしむ時間が、8時間を下らなかったマチスに、

「よく、それだけ毎日描き続けられますね」と訊ねると、マチスは答えた。

「1日でも絵を描かないでいられるくらいなら、絵描きなんぞは、やってないよ」と。

私自身、社会人となってから、この30年間に、折りあるごとに、「私は只今、青春真っ只中」と言い続けて来たのだが、それでは「青春」とは一体、如何なるものであろうか。

私自身、20代には、20代の青春があり、40代、50代には、それぞれの年代なりの青春があり、そして、無理やりや、こじつけでなく、60代になっても、60代の青春を生きている、といえる様な人生を生きていると素直に自信を持って言えると思うのである。

青春とは、肉体的なある時期、状態に対する謂れでなく、未知のものに対する旺盛な好奇心とフレキシブル、かつデリケートな思考力と感受性を持ち、この2つをベースにして、集中するものを持って生きる、精神の在り方を謂うのではないだろうか。

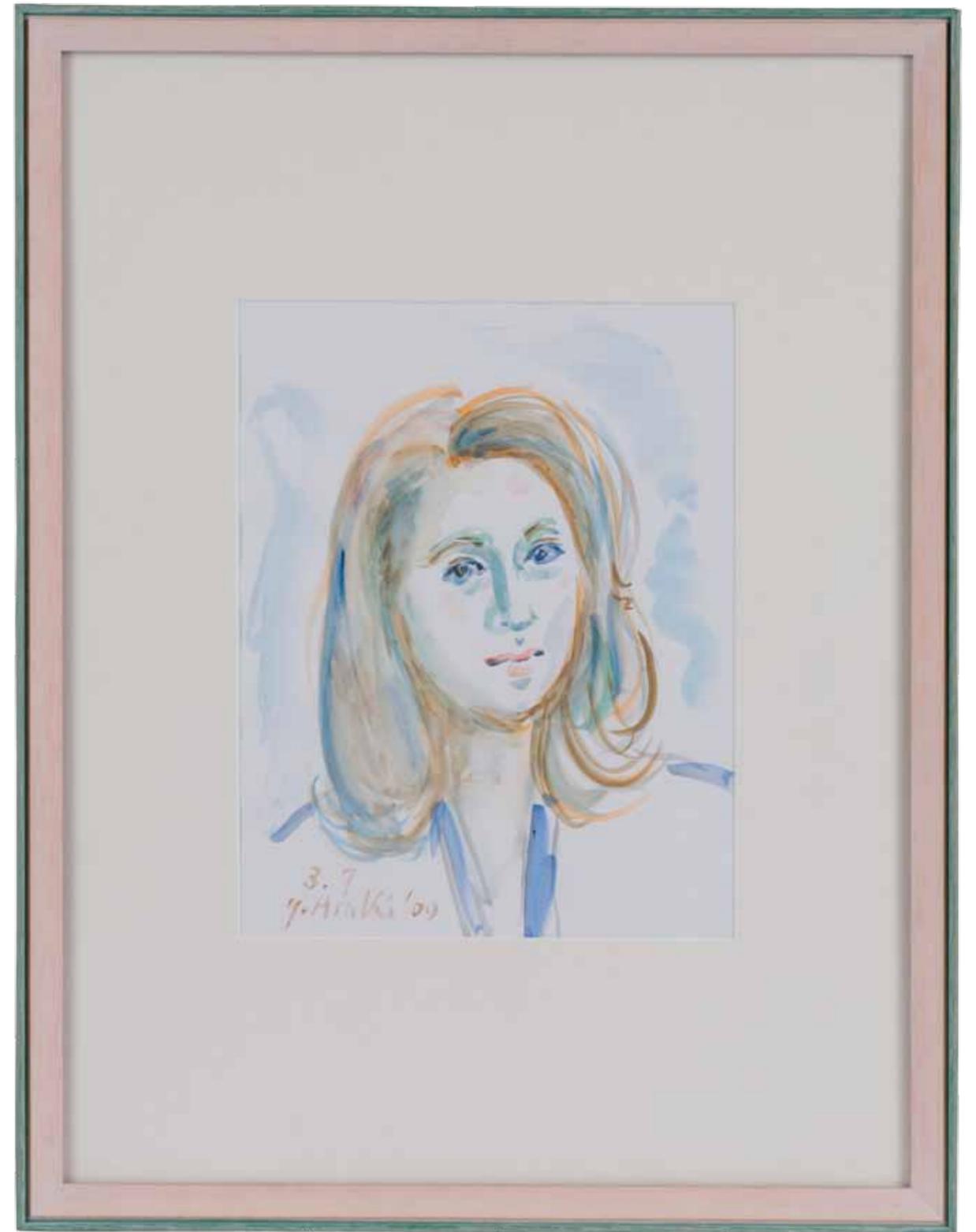
「芳泉だより」昭和60年 第11号より抜粋

刹那と永遠の美





線も色彩も少ない方がよい。
簡潔で明確な表現こそ最高の表現。



絵画にとってマチエール（絵肌）やメチエ（技術）等は、それ程重要なものではない。真に重要なものは絵画する心であり、絵画に対する思想であり更にその根底をなす人生に対する姿勢である。





完成とはもはや筆を加える事が出来ない状態に達した事であり、
絵画は本来常に未完成のものである。



一方では明快豪華なマチスの色彩に惹かれ、他方では晦渋な濁色の絵具の層を貫いて輝く鳥海青児の色彩に惹かれる。

